
第I部 グラビア・バーチャル・ツアー

尼崎の歴史資料・文化財

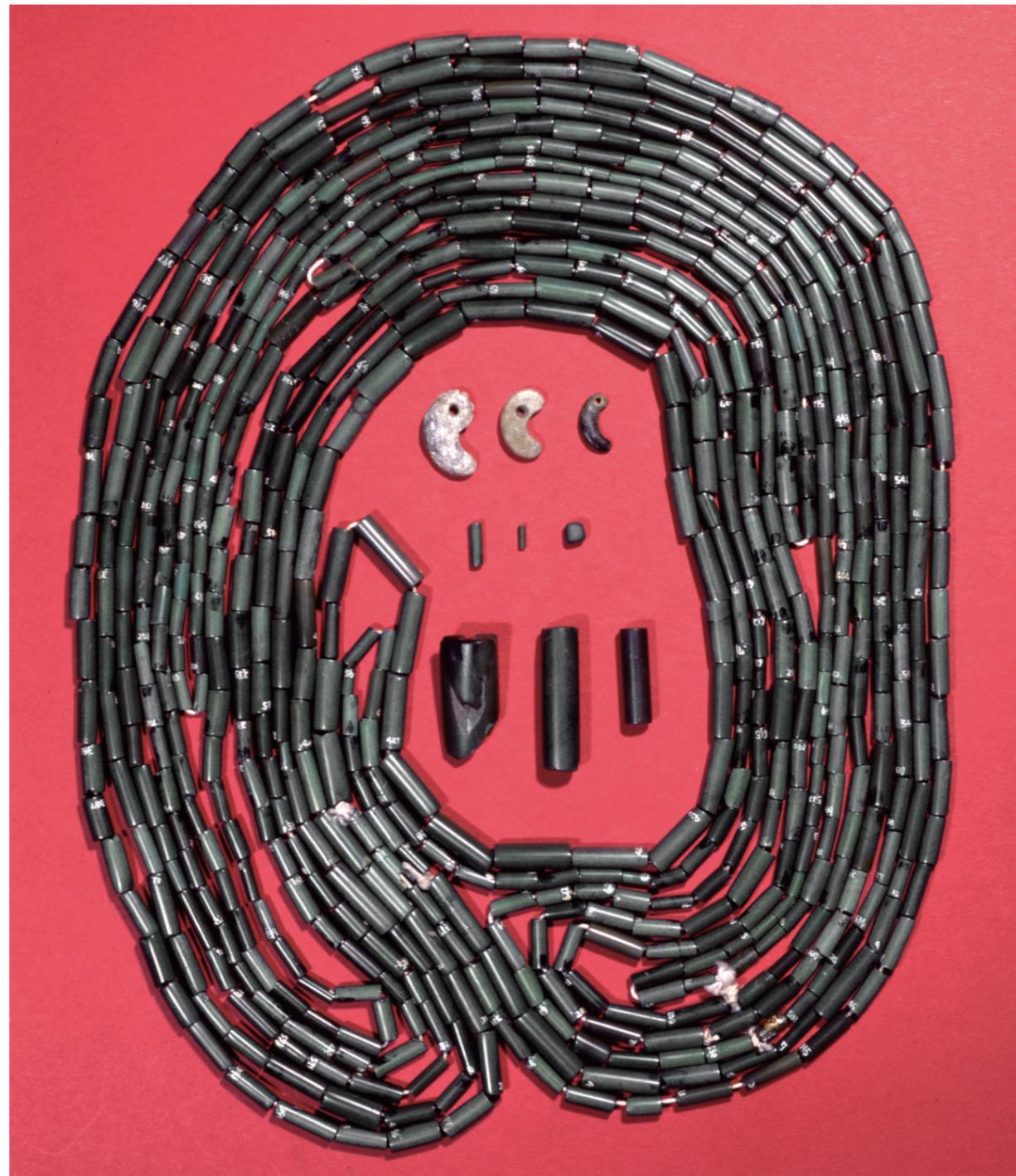


上 水堂古墳出土の三角縁吾作三神四獣鏡 直径23cm 神戸市西求女塚古墳や奈良県天理市・京都府城陽市の古墳から同型鏡が出土している。
 下 水堂古墳を北から望む 昭和37年（1962）撮影 村川行弘氏提供写真

三角縁神獸鏡 さんかくぶちしんじゅうきょう **水堂古墳** みずどう

各地に首長層の巨大墳墓が出現した古墳時代、現尼崎市域にも、猪名野古墳群と呼ばれる猪名川流域の古墳群を中心に数多くの古墳が造られました。歴史時代以降の開発や都市化にともない、その多くは墳丘の形をとどめていませんが、わずかに残る遺物などが、その歴史を伝えていきます。

水堂古墳は、猪名野古墳群とは系列の異なる古墳時代前期築造の前方後円墳です。副葬品として三角縁神獸鏡が出土しており、被葬者と大和王権の強い結びつきがうかがわれます。同古墳の出土品は、尼崎市指定文化財に指定されています。



上 田能遺跡出土の管玉・勾玉・ガラス玉
 左 史跡公園の復元住居

田能遺跡 たの

弥生時代全期を通じて大規模な集落が営まれた、尼崎及び阪神地方を代表する弥生遺跡。史跡公園・資料館が整備され、多くの人が学習や見学に訪れるほか、古代の生活や農作業を体験するプログラムなども活発に行なわれています。

土器や木製農具、装飾品などが出土しており、これらの遺物が当時の文化を物語っています。

(国指定史跡、出土遺物は兵庫県指定重要文化財)



第一部グラビア・バーチャル・ツアー「尼崎の歴史資料・文化財」

摂津職河邊郡猪名所地図

天平勝宝八年（七五八）、現在のJR尼崎駅付近にあった皇室の領地が、東大寺に勅施入されました。勅施入というのは、天皇の命により土地や財物などを寺社に寄進することをいいます。

摂津職河邊郡猪名所地図は、このとき作成され東大寺に交付された絵図を、一二世紀頃に写したものと考えられています。描かれている場所は、現在のJR尼崎駅付近から南の長洲にかけてで、絵図の下部には「杭瀬濱」「長渚濱」「大物濱」といった地名も記されており、東大寺領となつて以降、荘園猪名荘・長洲荘として開発が進められた様子が描き加えられています。

この長洲・大物の浜のさらに南の砂州が陸地化し、中世尼崎町となりました。現尼崎市域を描いた最古の絵図であると同時に、尼崎のルーツとなる土地の開発を記録したものであり、尼崎の歴史を語るうえでもとても重要かつ貴重な史料のひとつといえます。

（尼崎市所蔵、兵庫県指定重要文化財 門田隆夫氏撮影、縦六四・五センチ、横一一三・五センチ）

第一部グラビア・バーチャル・ツアー「尼崎の歴史資料・文化財」

勅掃沫職従三位行大文文之

之真人智努

天平勝宝八歳十二月十七日
西海攝津河邊郡

擬女但元位九川内直令内
主帳五位九川内直指人
關柳田使従六位下支田甲造三田次
正七位下行女屋積臣牛食



木造阿弥如来坐像
治田寺

戸の内・治田寺阿弥陀堂のご本尊です。像高一三八センチ。ヒノキ材による寄木造りで、内部を空洞にする内割り、漆箔仕上げがほどこされています。まるみを帯びた体躯やおだやかな面相は、一一世紀中頃に和様彫刻の様式を確立したとされる仏師・定朝の流れをひくものといえます。その一方で、肉の厚い衣文の彫出や相貌に表れる理知性などの特徴には、鎌倉期の様式に通じるものがあり、一二世紀後半頃の作品と考えられています。

(兵庫県指定重要文化財、荒井英一氏撮影)



木造日隆上人坐像 本興寺

開明町・本興寺の開山堂にまつられている、同寺を創建した日隆上人の坐像です。

日隆上人は元中二年(至徳二年、一三八五)に越中に生まれ、応永二七年(二四二〇)、尼崎において本興寺を建立、法華宗(本門流)の開祖となりました。本興寺勸学院(現興隆学林専門学校)を創設したほか、多くの著述を残したことも知られています。

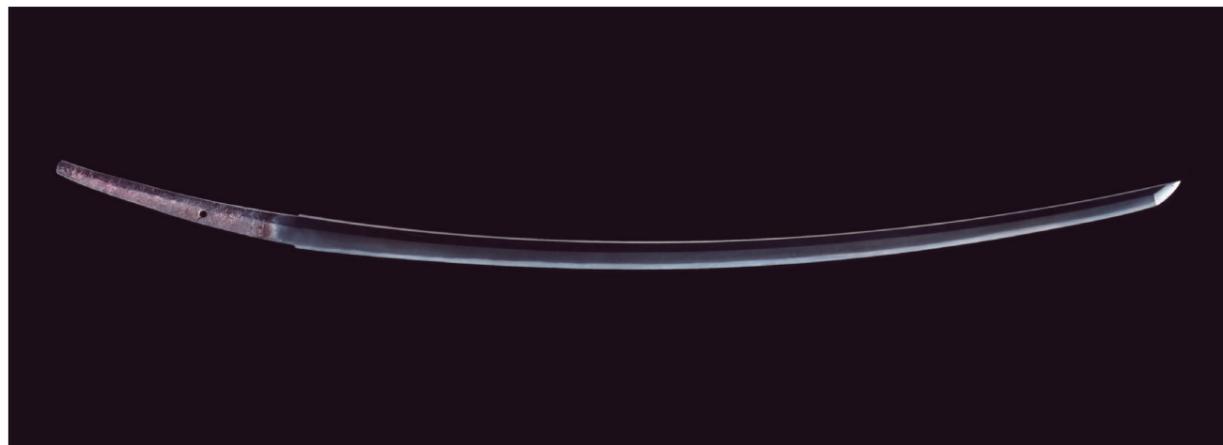
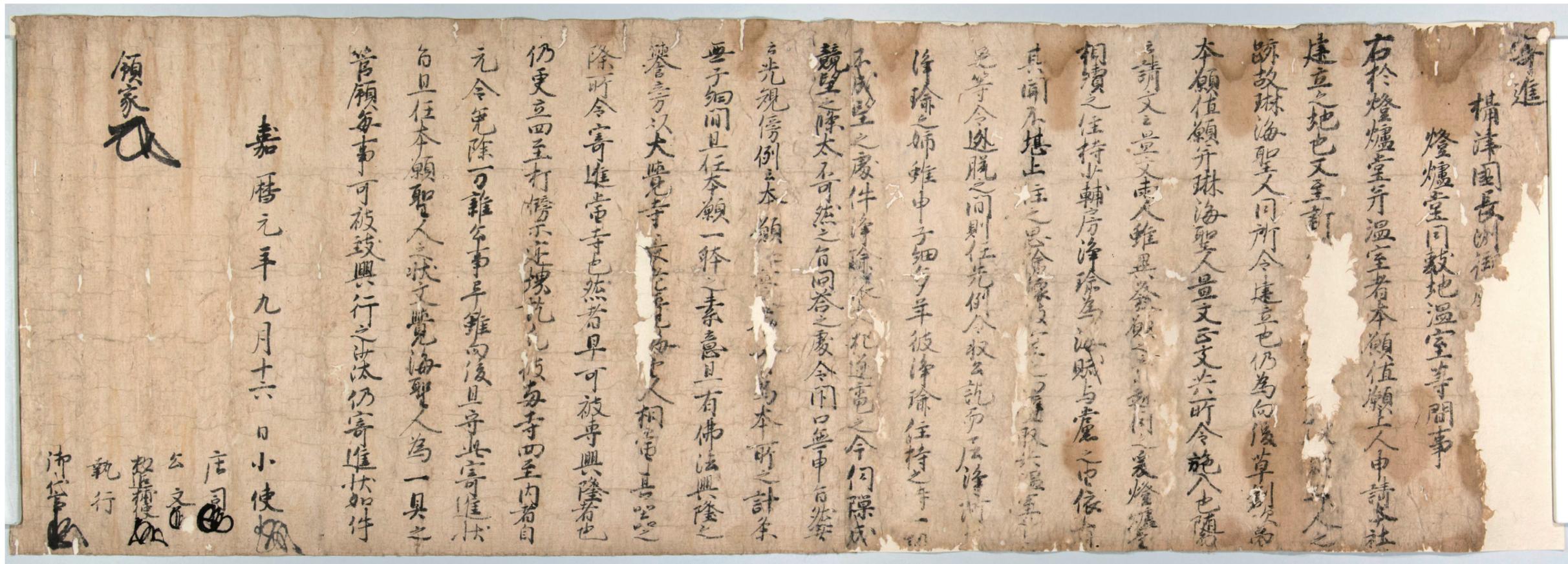
坐像は像高七一センチの寄木造りで、彩色され玉眼が入れられています。本興寺の寺記は、上人が六九歳(数え年)であった享徳二年(一四五三)、堺の仏工・浄伝が坐像を造るよう命じられ、翌享徳三年に完成したと伝えられています。

坐像の個性的な容貌は、上人のお顔を忠実に写し刻んだものと考えられており、能面風の肉どりなどに、室町期の肖像彫刻の特徴がよく表れています。(国指定重要文化財、本興寺提供写真)

長洲御厨領家寄進状

大覚寺文書

兵庫県指定重要文化財である大覚寺文書五六点のうち的一点。嘉暦元年（一二三二）に鴨社領長洲御厨の領家が燈焔堂や湯屋を大覚寺に寄進したことが記されています。



太刀 銘恒次（数珠丸）本興寺

鎌倉初期に後鳥羽天皇の御番鍛冶を務めた備中の刀工・青江恒次の作品です。日蓮上人の護身刀として信者から贈られたものと伝えられ、天下五剣のひとつに数えられます。腰もとで急に反る姿や鉄の鍛え方などに、備中国青江の鎌倉期、古青江と呼ばれる流派の特徴がよく表れています。

行方不明であったこの太刀を、尼崎在住の刀剣鑑定家・杉原祥造が大正期に見出し、本興寺に寄進したということです。（国指定重要文化財、本興寺提供写真）



太刀 銘守家

鎌倉中期、備前島田の刀工・守家の作品です。切先の詰まった姿や華やかな丁子乱れの刃文に、守家の特徴がよく表れています。

尼崎藩松平家（桜井家）に伝来し、最後の藩主忠興から櫻井神社に寄進されました。松平家の九曜紋をあしらった飾太刀拵は、江戸時代の作品です。

（国指定重要文化財、尼信文化基金所蔵、兵庫県立歴史博物館提供写真）



(石造遺品は文化財であるとともに墓石であり、信仰の対象でもあります。見学や調査の際には敬意を払い、十分に配慮するようにしてください。)



第一部グラフィア・バーチャル・ツアー「尼崎の歴史資料・文化財」

尼崎市域に現存する中世石造美術の代表的な遺品をご紹介します。原形の一部が失われたものなど撮影がむずかしいものは、昭和年代のモノクロ写真を掲載しました。

(右から)
本興寺笠塔婆 開明町
本興寺歴代住職の墓のうち最大規模であり、一五世紀中頃までに造られた最もものと考えられます。(尼崎市指定文化財)

石造宝篋印塔 水堂
南北朝中期頃の作品と考えられます。市内に現存する宝篋印塔のうち、唯一ほぼ完全な形の遺品です。かつて水堂の路傍にあり、現在は常春寺境内に移されています。(尼崎市指定文化財)

石造十三重塔 西武庫須佐男神社
元応二年(一三三〇)造立の銘があり、阪神・淡路大震災時に倒壊し塔身が失われています。(兵庫県指定重要文化財)

如来院石造笠塔婆 (左上) 寺町
嘉暦二年(一三三七)の銘が刻まれ、上部を欠失するも、この時代の笠塔婆を代表する遺品です。(尼崎市指定文化財)

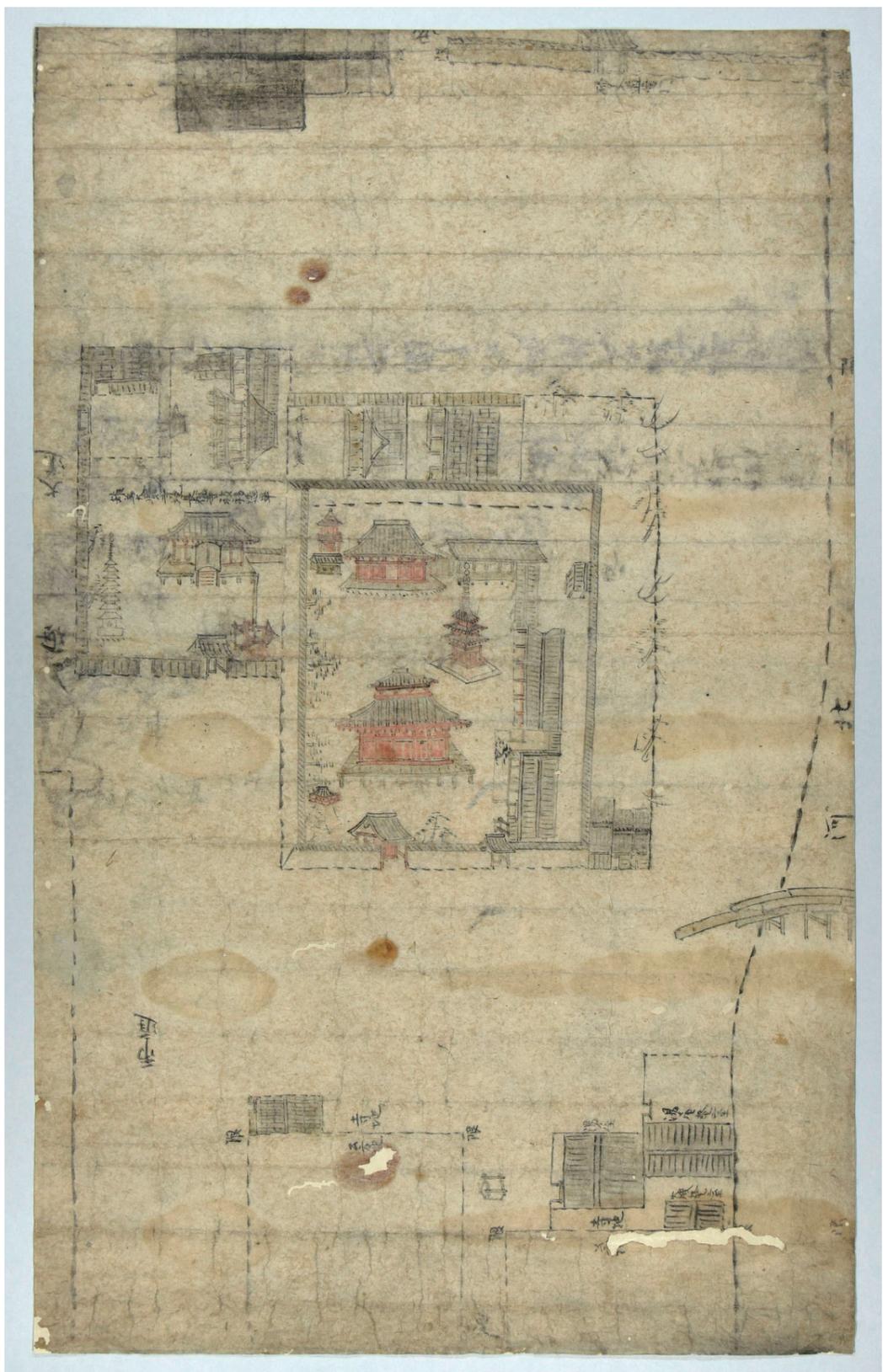
板碑 阿弥陀坐像板碑・地藏立像板碑
今北 東光寺(左下)
阿弥陀坐像は市内現存最古の板碑で鎌倉後期造立、地藏立像は南北朝中期頃造立と考えられます。(尼崎市指定文化財)

第一部グラフィア・バーチャル・ツアー「尼崎の歴史資料・文化財」

大覚寺絵図 大覚寺文書

長洲御厨領家寄進状と同じく、兵庫県指定重要文化財である大覚寺文書五六点のうち的一点です。正和四年（一二二五）に描かれたもので、向かって右側が北

です。伽藍内部には金堂・三重塔・講堂・鐘楼などがあり、外には大道が通り、大物川に橋が架かっていたことがわかります。市が立つ市庭や、嘉暦元年（一二三六）に大覚寺に寄進される湯屋も描かれており、中世尼崎町の様子を伝える貴重な絵図史料といえます。（東西五〇・一センチ、南北三二・四センチ）

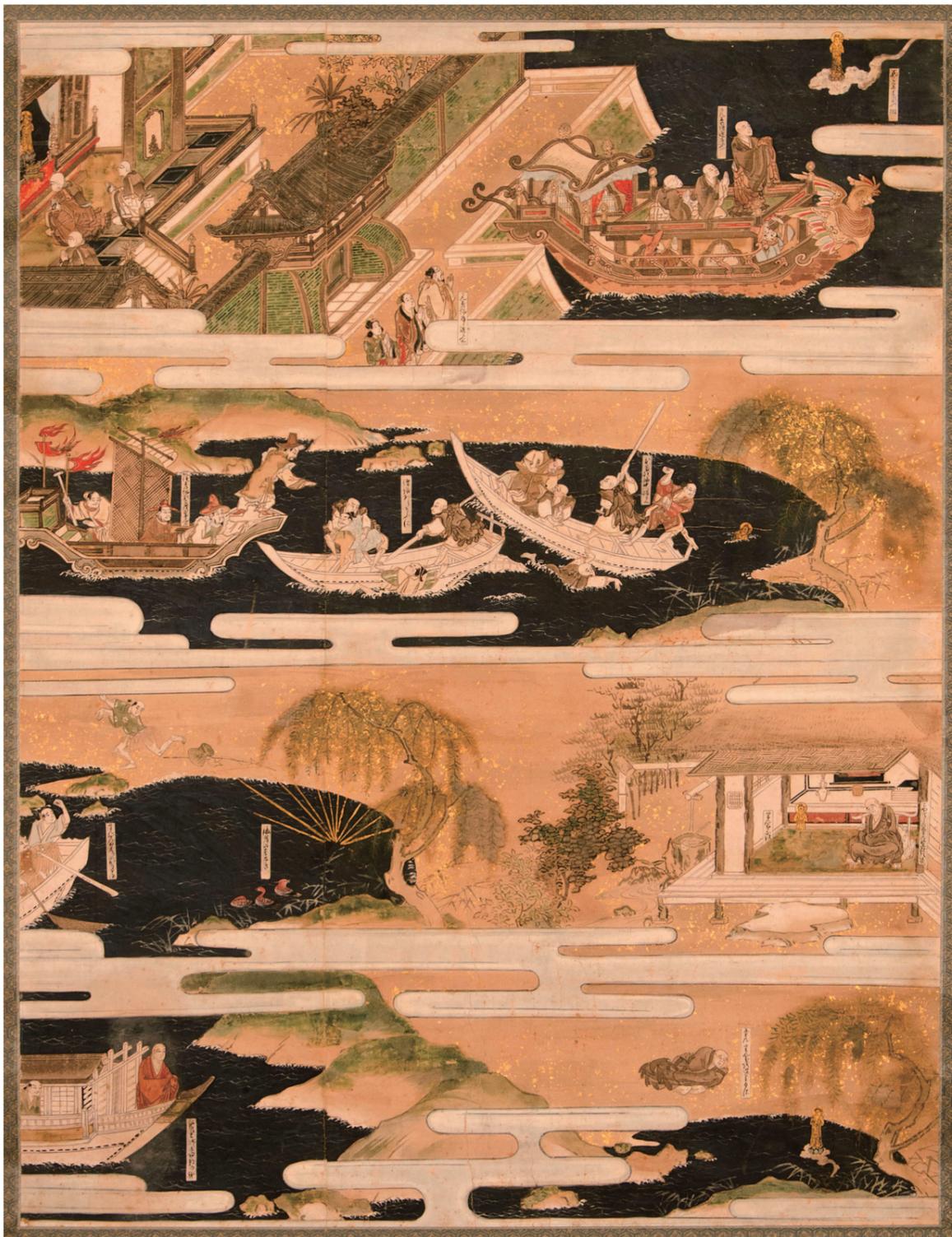


絹本着色涅槃図 長遠寺

寺町・長遠寺に伝わる涅槃図です。菩提樹のなか、入寂する釈迦を囲み悲嘆にくれる人々や、集まるさまざまな動物が描かれています。人々や動物を描く細密で生氣ある筆致や、菩提樹の独特の描写に絵師の力量が表れており、室町時代末期のすぐれた絵画作品といえます。

江戸時代の表装に「永禄八年二月吉日、当山六世日鎮上人代」と制作年月が記されています。

（尼崎市指定文化財、縦二四四・五センチ、横一九七・五センチ、尼崎市教育委員会提供写真、永禄八年＝一五六五）



紙本着色
浄光寺縁起図

常光寺の地にある寺院・浄光寺には、天長年間（八二四～八三四）に空海上人が同寺を開基したとする縁起類が伝えられています。この縁起図も、縁起を伝える史料のうちの一点です。

二幅にわかれており、漢土の僧俗の争いにより海中に失われた金身の観音像を、毘陽寺の僧惠満が柳のもとに見出し空海上人に託し、『太平記』が記す摂津守護代・箕浦次郎左衛門俊定と楠木正儀らの合戦による同寺焼亡や高潮などの災厄を逃れ、時を経て観音像が同寺に戻る様子が描かれています。

濃彩による描写は桃山時代に盛んであった風俗画の作風に通じ、いわゆる町絵師が登場し始める慶長・元和年間（一五九六～一六二四）頃の作品と考えられます。

（尼崎市指定文化財、縦一一センチ、横八七・五センチ、二幅）





本興寺開山堂

前掲の木造日隆上人坐像をまつるお堂です。寺伝によれば、日隆上人入滅後、文明元年（一四六九）に上人の著作と坐像を安置する堂宇を建立し、御文庫堂と称したと伝えられます。昭和三八年（一九六三）の修理時に発見された棟札には永禄元年（一五五八）と記されており、この年に三間四方の開山堂に改築され、元和三年（一六一七）に現在地に移築、その後数次の増改築を経て現在の姿になったものと考えられています。

桁行柱間九間、梁行柱間三間、屋根は撞木造り・本瓦葺で正面に唐破風を付け、天井には龍が描かれています。（国指定重要文化財、本興寺提供写真）

本興寺三光堂

本興寺の鎮守です。棟札から天正（慶長期）一六〇〇年前後に建立され、元和三年（一六一七）に現在地に移築されたものと考えられます。

三間社流造り、桁行柱間三間、梁行柱間二間、正面軒に唐破風を付け、屋根は檜皮葺形式の銅板葺です。彫刻が施された墓股や木鼻、欄間の透彫りや斗拱などにみられる、極彩色の豊かな装飾性が特徴です。

（国指定重要文化財、本興寺提供写真）



長遠寺本堂・多宝塔

寺町・長遠寺の本堂には、慶長三年（一五九八）と元和九年（一六二二）の棟札が伝わり、前者が尼崎町市場（いちば）への建立時、後者が現在地における再建時のものと考えられます。桁行柱間五間、梁行柱間六間、屋根は入母屋造り・本瓦葺で、正面中央一間に向拝を設けています。

多宝塔は慶長一二年に市場裏に建立され、元和三年に現在地に移築、その際正面が西向きであったものを東向きに建て直したと考えられています。二層・本瓦葺で、上層には二本の円柱を円形に建て、柱間三間四方の下層は周囲に擬宝珠高欄付きの縁をめぐるらせりなど、入念な造りを見せています。

（いずれも国指定重要文化財）



本興寺方丈

客殿とも呼ばれ、元和三年（一六一七）建立、桁行柱間一〇間、梁行柱間七間、屋根は入母屋造り・本瓦葺の建物です。各部屋の壁面・襖には曾我招興の水墨山水画や高平春下の人物・花鳥画などが描かれ、建物の南側には庭園が設けられています。（国指定重要文化財、本興寺提供写真）



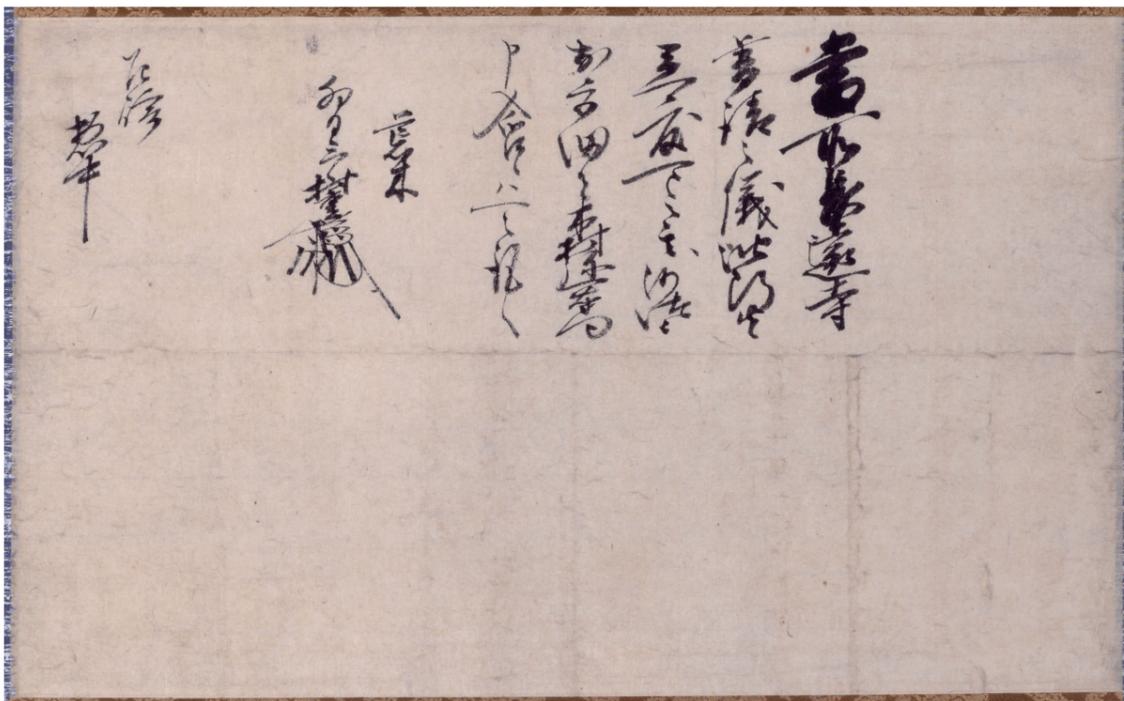
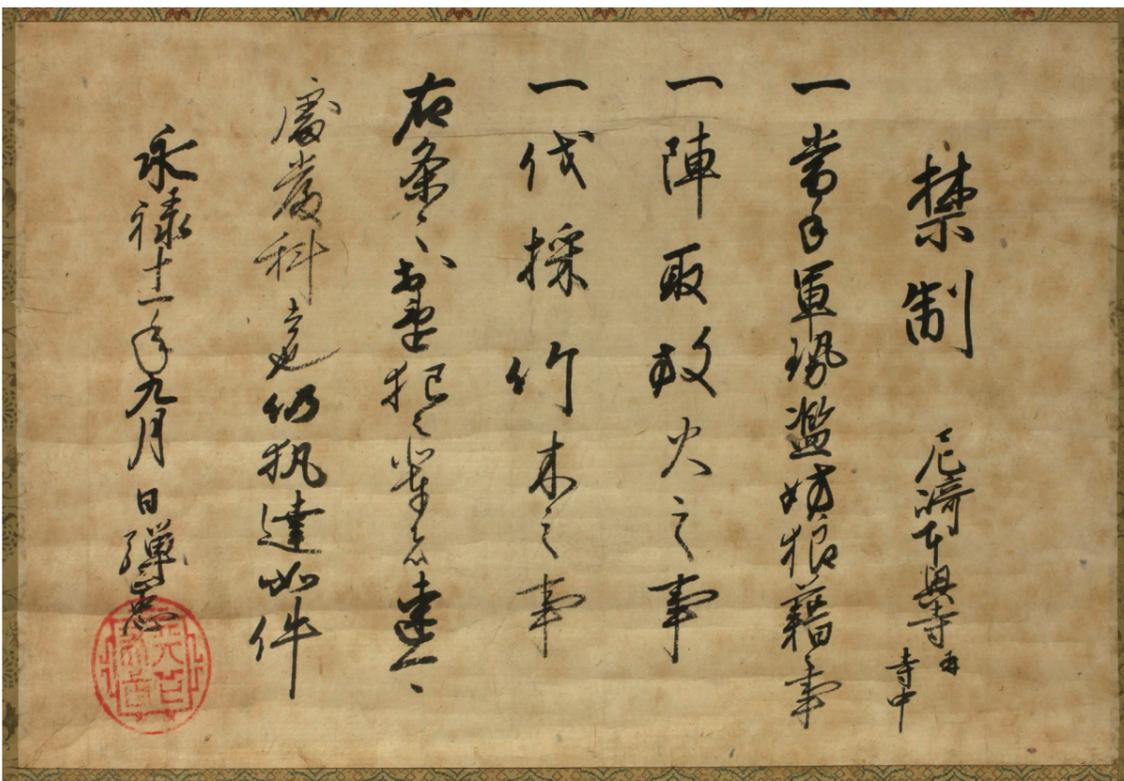
富松神社本殿

富松町二丁目に所在する東富松村の氏神・富松神社の本殿です。
 一間社春日造り、屋根は柿葺で、現在は鉄筋コンクリート造の覆屋内に納められています。同社所蔵の古文書「福松寺記録」が、寛永十三年（一六三六）という建立年代を記した「牛頭天王棟札」があったことを記録しており、建物の様式もこの年代に合致しています。
 いずれも極彩色をほどこした臺股や組物など、華麗な装飾的要素の豊かさに、時代の特徴がよく表れています。
 （兵庫県指定重要文化財、荒井英一氏撮影）



長洲天満神社本殿

長洲本通三丁目に所在する中長洲村の氏神・天満神社の本殿です。
 一間社流造り、屋根は檜皮葺で、現在は宝暦九年（一七五九）建立の覆屋内に納められています。棟札から、慶長十二年（一六〇七）建立であることがわかっており、年代が確認されている市内最古に属する神社建築です。木鼻を豊富に出し、絵様を変えている部分など、時代の特徴が表れた華麗な建築といえます。
 なお、後掲の長洲天満神社絵馬は、この本殿の檜皮葺屋根野地板補修材として、裁断され使用された状態で見つかったものです。
 （兵庫県指定重要文化財、荒井英一氏撮影）



上 織田信長禁制
本興寺文書

永禄十一年（一五六八）九月、將軍足利義昭を擁して上洛した織田信長が、軍勢による略奪や暴力行為を禁じ、本興寺を保護することを証したものである。

尼崎市指定文化財である本興寺文書四九点のうち的一点です。（本興寺提供写真）

下 荒木村重書状

長遠寺文書

信長配下として摂津一國を支配した荒木村重が尼崎惣中に対して、長遠寺の普請を油断なく行なうよう命じること、委細は木村弥一右衛門に申し含めていることを伝える書状で、天正二年（一五七四）のものと考えられます。

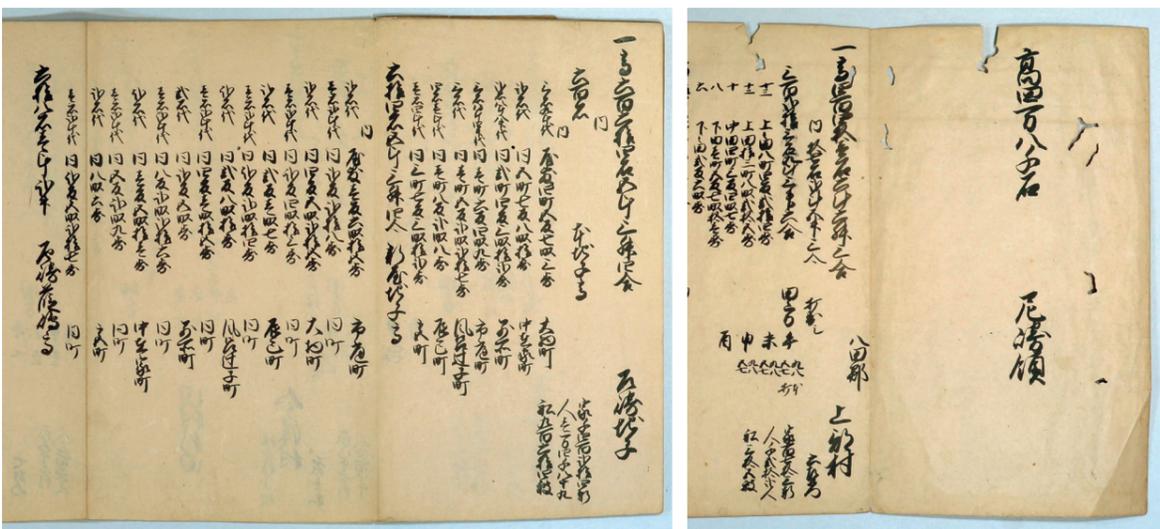
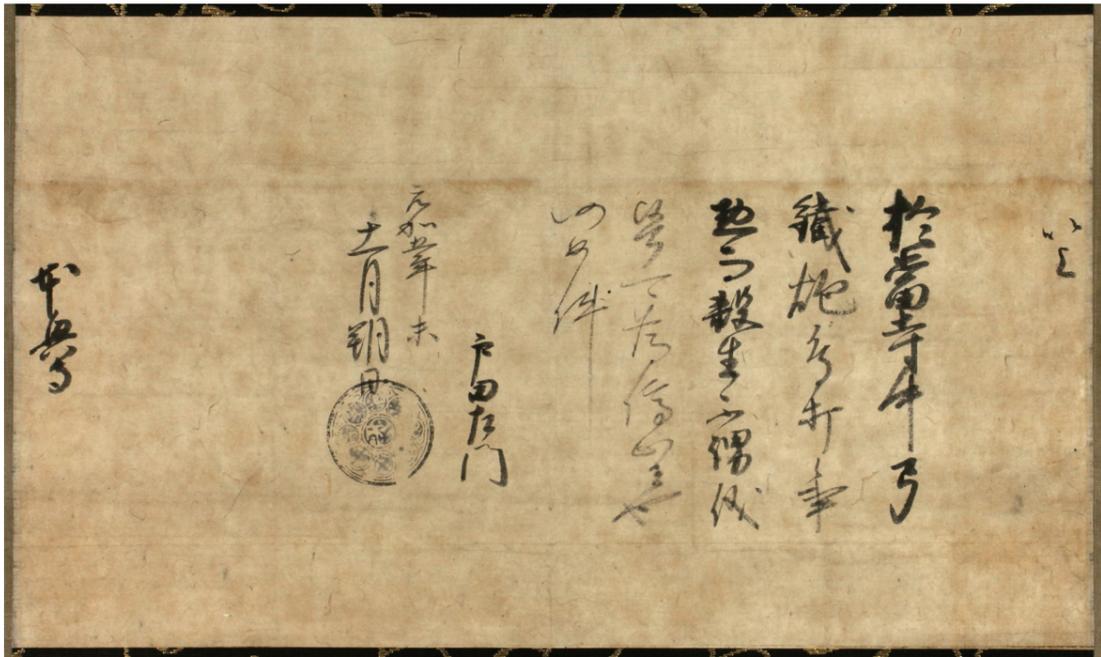
尼崎市指定文化財である長遠寺文書八点のうち的一点です。（尼崎市教育委員会提供写真）

戸田氏鉄禁制(折紙)
本興寺文書

元和三年（一六一七）、尼崎に入封した戸田氏鉄は、本興寺をはじめとする尼崎町の寺院を寺町に移転させ、新たな城と城下町の建設に着手します。本興寺の跡地には、尼崎城の天守や本丸が築かれることになりました。

元和五年に出されたこの禁制は、移転した本興寺の寺中における殺生を禁じる内容の黒印状です。江戸時代に入ると朱印状の発給は將軍に限定され、大名は黒印を用いるようになっていきました。

尼崎市指定文化財である本興寺文書四九点のうち的一点です。（本興寺提供写真）



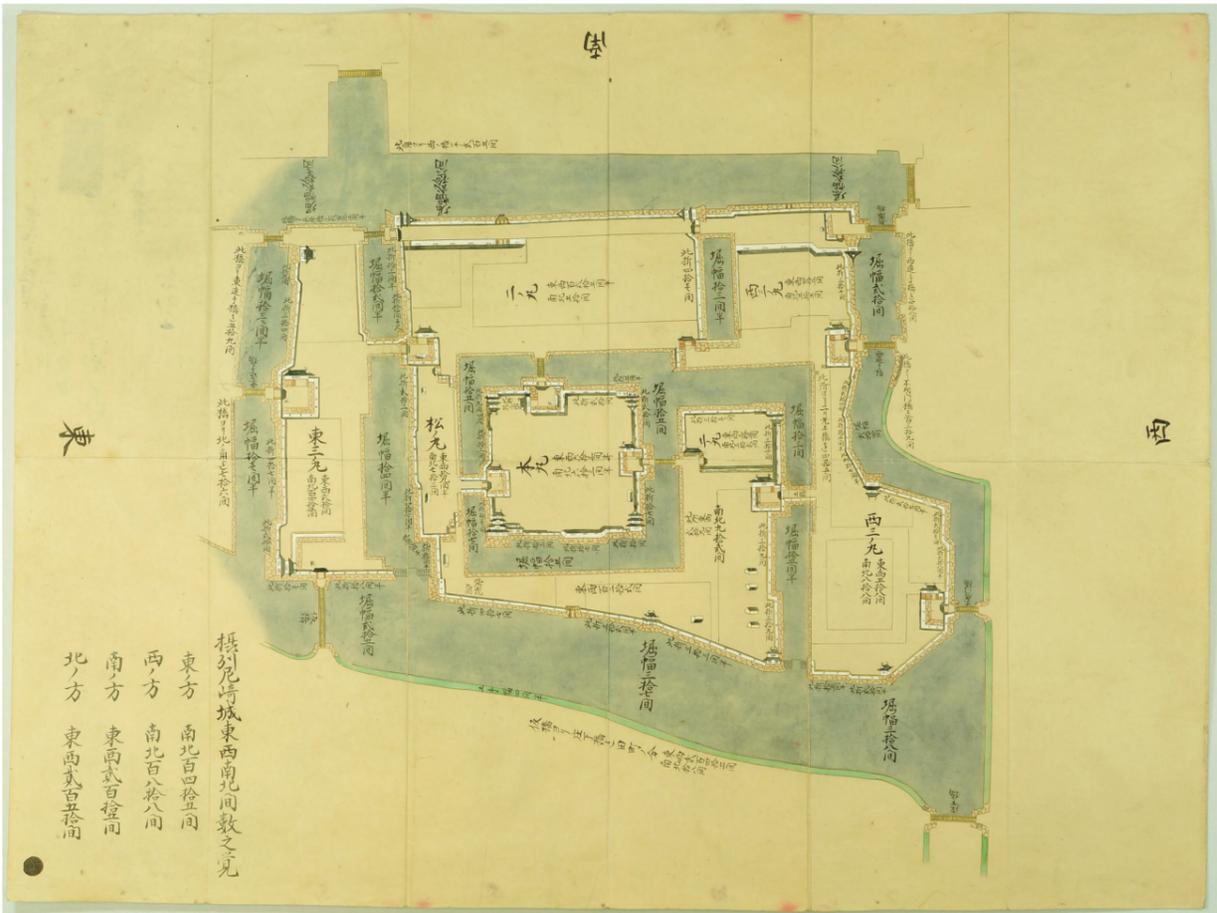
尼崎藩青山氏領地調べ
加藤省吾氏文書

寛永一二年（一六三五）、戸田氏に替わって青山氏が尼崎に入封します。当初の領地高は、戸田氏と同じく五万石でしたが、分知により二代目幸利以降、四万八千石となります。

この領地調べは、幸利が藩主であった寛文九年（一六六九）頃に作られたものと考えられます。八部郡上部村（神戸村、現神戸市）を筆頭に、摂津国西部の尼崎藩領が西から東へと記され、各町村の石高や田畑の等級内訳、家数・人数、庄屋の名前などが記されています。

写真の左側は、尼崎城下の部分です。合計六百石の地子高（町方年貢）を、大物町以下七町が負担する町ごとの内訳などが記されています。

（尼崎市立地域研究史料館寄託 武田壽夫氏撮影）



摂州尼崎城絵図 加藤省吾氏文書

尼崎城図は、地震や風水害などにより破損した個所の修復を願い出る平面図や、天守・櫓の立面図、本丸御殿の平面図など、いくつかの種類のもが残っています。この絵図も、そういった尼崎城図のうち一枚です。本丸や二の丸といった区画ごとに、櫓や門、石垣などの構造物が描かれており、区画・石垣・堀などの寸法も細かく記されています。

(尼崎市立地域研究史料館寄託、東西四七五センチ、南北三三五センチ、武田壽夫氏撮影)

尼崎城下絵図 寛延頃 西本町・貴布禰神社

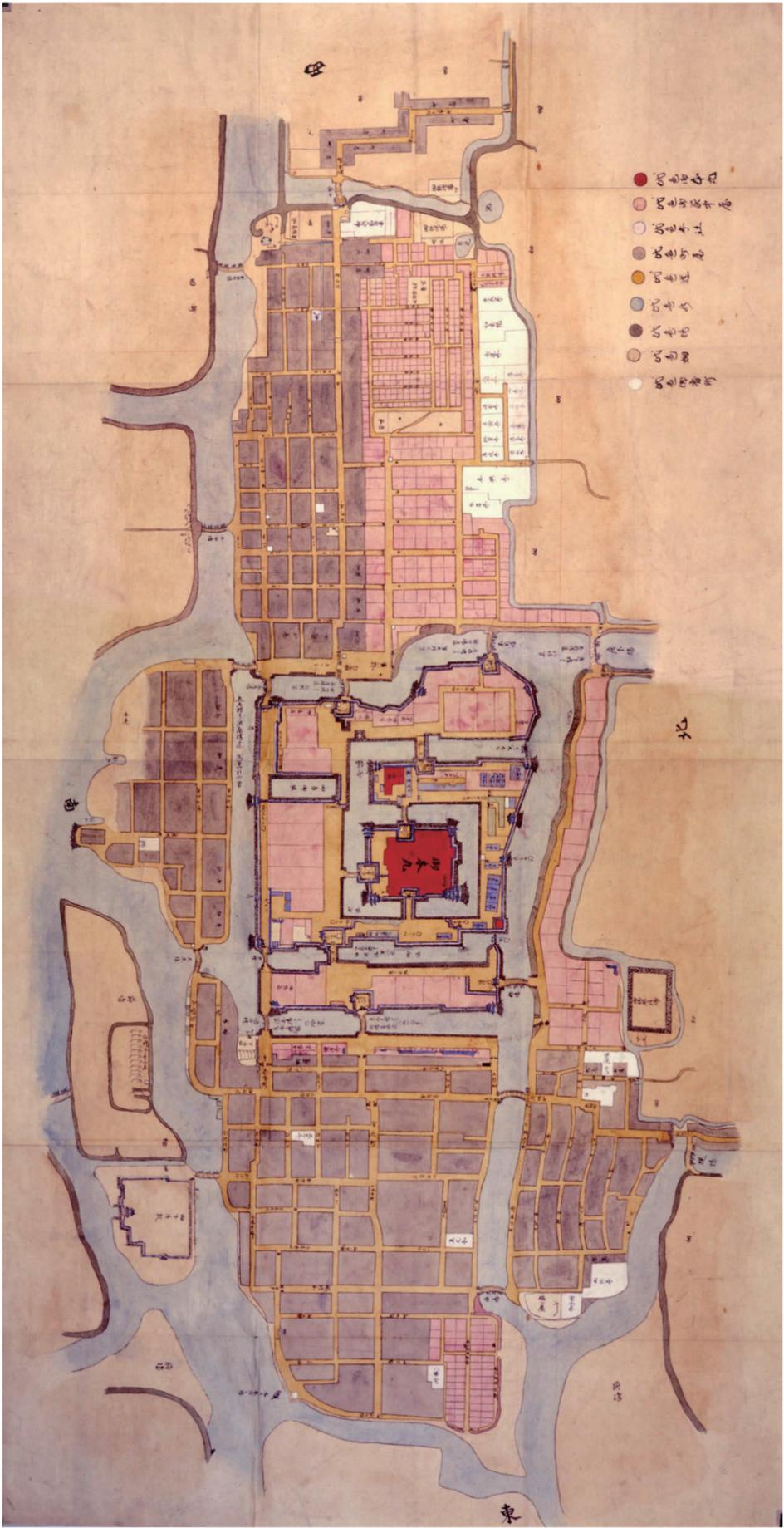
尼崎城下絵図は、いくつかの時代の平面図や鳥瞰図が作られています。西本町・貴布禰神社に伝わるこの絵図は、寛延年間(一七四八〜五二)頃の様子が描

かれていますと考えられます。

城の本丸や武家屋敷、町人が住む町場などに色分けされており、城を中心に城内と北・西に武家屋敷、東と北東(大物町)、南(築地町)に町場が配置されていることがわかります。城の施設や橋の名称、町名や寺社名などが細かく記されていますが、東西がやや庄

縮され南部が省略されるなど、必ずしも正確な実測図ではありません。

なお、この絵図には記されていませんが、絵図によっては武家屋敷に住む武士の名前や、町場を所有する町人の名前が記されているものもあります。(東西一八一センチ、南北一一九センチ)



築地町絵図 築地町文書

近世の町場は商業地であり、商売上の担保として土地の質入れや売買などが盛んに行なわれました。所有

権の移動や区画の分筆・合筆も多く、区画と所有者を記録する町絵図が時に応じて作られました。この築地町の絵図も、尼崎城下に残るそういった絵図の一枚です。近世前期、一八世紀初頭頃までに作り

れたものと考えられ、各通りの名称と幅員、区画ごとの所有者名、間口・奥行きの間数等が記されています。(尼崎市立地域研究史料館寄託、東西二〇センチ、南北二二〇センチ、右が北)



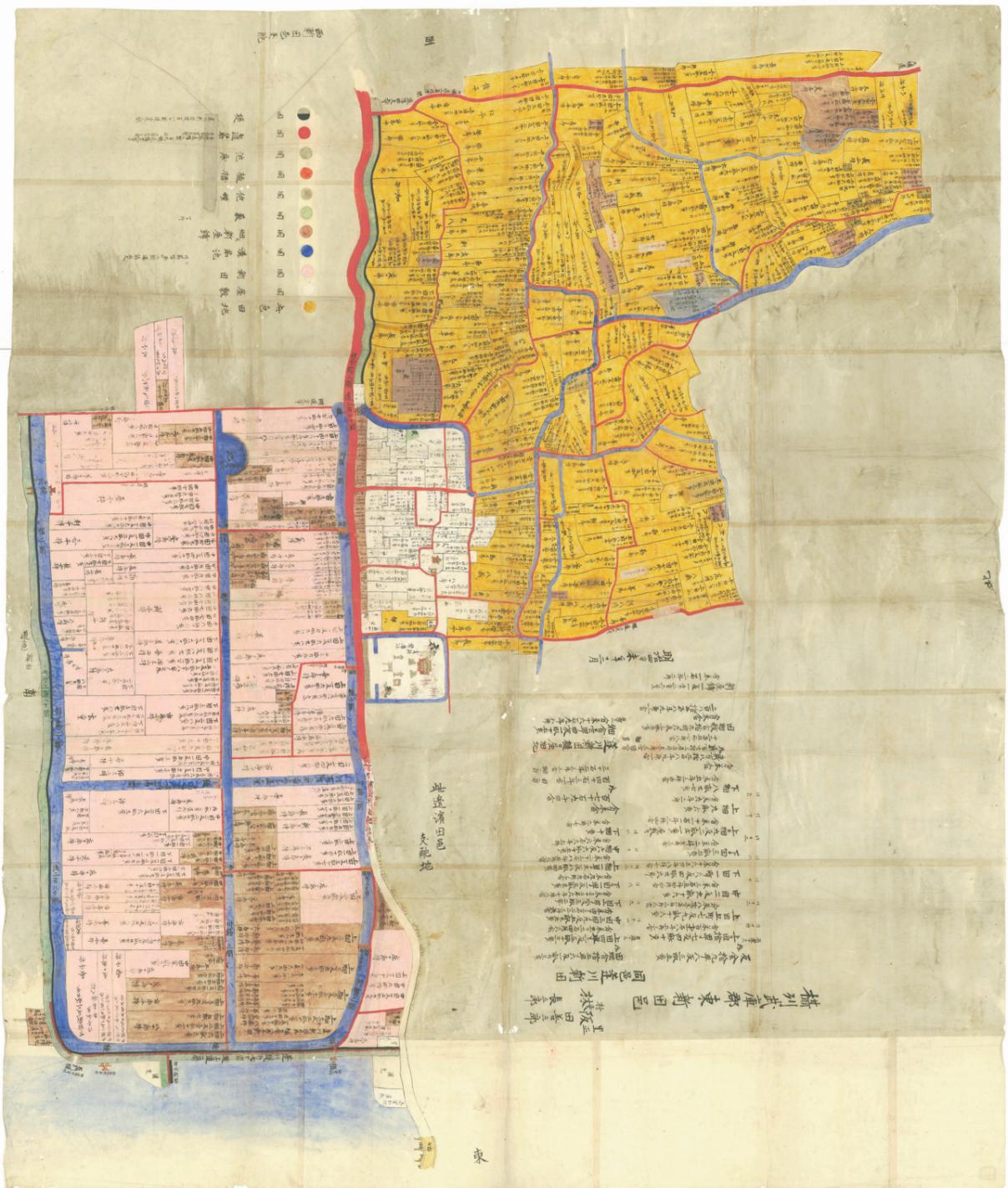
東新田村一筆限り絵図
柳川啓一氏文書

近世から近代にかけて、各地の村々で、さまざまな用途の村絵図が作成されました。明治四年(一八七二)一二月に作成されたこの絵図は、そういった村絵図のうち一枚です。東新田村の田畑について、等級別の面積・石高を記すほか、村の屋敷地・古来の農地・新田開発された農地などを色分けし、区画一筆ごとの字名、田畑の等級・面積、耕作者名を細かく記しています。

この年に廃藩置県を実施した明治維新政府は、翌明治五年以降、地券の発行や地租改正の作業を通じて近代的土地所有制度を確立し、同時に租税制度を整備していきます。絵図に記された近世以来の耕作者たちは、土地所有権を認められ、同時に地租負担の義務を課せられることになっていきました。

この絵図は、こういった一連の作業を準備するための基礎図面として作成されたものではないかと考えられます。

(尼崎市立地域研究史料館所蔵、東西一八〇センチ、南北一七四センチ、右が北)



浅葱糸威二枚胴具足 櫻井神社

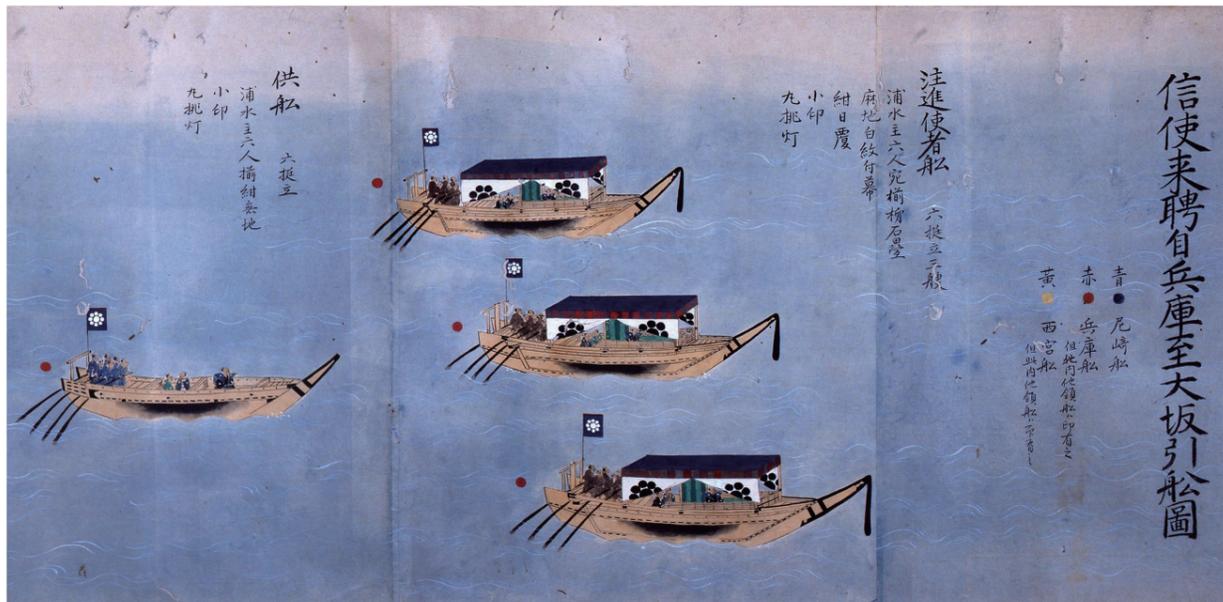
あさぎいとむすじにまいどうぐそく
尼崎藩主松平家の家祖・信定は、徳川家五代長親の三男として生まれ、桜井郷（現愛知県安城市）を本貫

の地とする戦国武将でした。この甲冑は、信定が所用したものと伝えられています。兜の前立が失われ鍬形は後補ですが、兜・胴・箆手・佩楯・脛当などの具足が揃っており、戦国時代の甲冑の貴重な遺存例です。

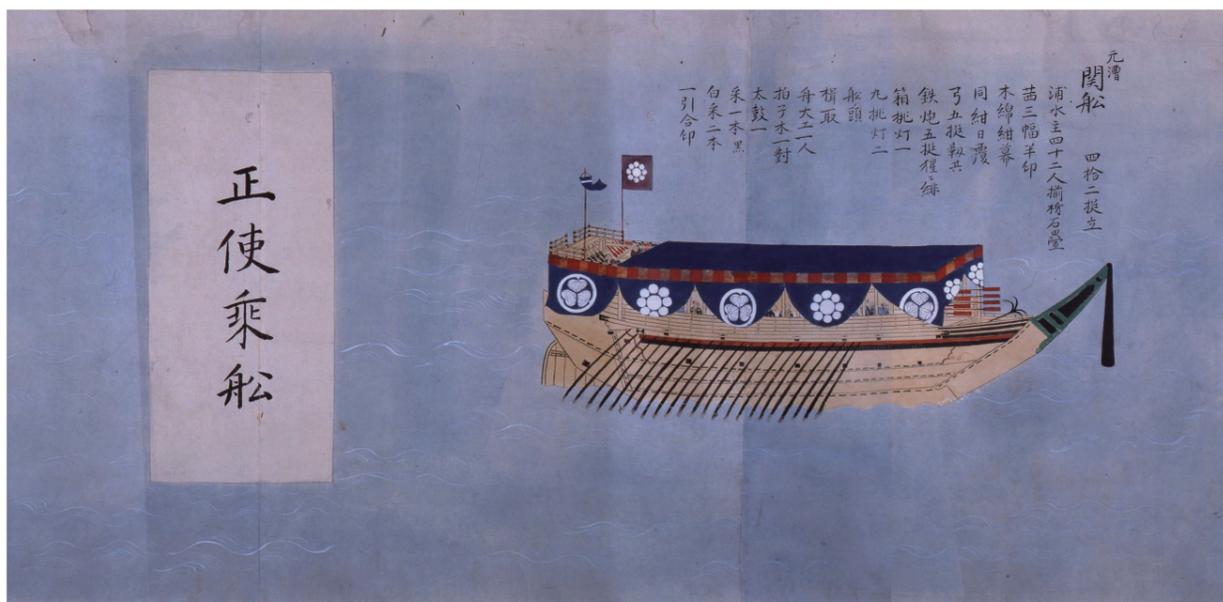
櫻井神社に伝えられた尼崎藩ゆかりの武具・古文書類とともに、尼信会館において展示公開されています。（尼崎市指定文化財、尼信会館寄託、兵庫県立歴史博物館提供写真）



信使来聘自兵庫至大坂引船圖



元澤 関船 四拾二挺立



信使来聘自兵庫至大坂引船圖 櫻井神社

江戸時代、徳川將軍の襲職を祝賀するため朝鮮信使が来朝する際、尼崎藩領である兵庫津での接待と、兵庫から大坂までの海上警護役を尼崎藩が務める決まりでした。櫻井神社に伝わる信使来聘自兵庫至大坂引船図は、この海上警護の船団を描いた二巻の紙本着色絵巻です。

絵巻には、注進使者船六挺立三艘を筆頭に、供船・先乗・番船、最大四二挺立の関船や、これより小型の小早といった軍用船、水船や薪船、朝鮮人の荷物を運ぶ百石積みの渡海船などが描かれています。いずれも、尼崎藩松平家の家紋である九曜紋の幕を引き、あるいは幟を掲げています。絵巻の末尾には、これらの船数合計四五四艘、浦水手（船の乗り手）二、四二八人と記されています。松平氏が尼崎藩主であった時代、四度にわたって信使が藩領沖を通航していますが、どの回の様子を描いたものかは不詳です。

なお、藩の記録として作られたためか、朝鮮信使の正使・副使、日本側の責任者である対馬藩の乗船は描かれておらず、これらは文字で示されています。

尼崎市指定文化財である櫻井神社所蔵資料のうちの一点として、浅葱糸威二枚胴具足とともに、尼信会館において展示公開されています。

（尼信会館寄託、兵庫県立歴史博物館提供写真）



上 長洲天満神社絵馬
景清・国俊鑑引き図

前掲の長洲天満神社本殿を平成九年（一九九七）に修理した際、檜皮葺屋根野地板補修材として裁断して使用されていた絵馬二七面が見つかり、のちに尼崎市指定文化財に指定されました。この絵馬はそのうちの一枚で、源平の屋島の戦いの逸話を描いたもの。享保一〇年（一七二五）と奉納年が記されています。

（尼崎市教育委員会提供写真）

下 素盞鳴神社おかげ踊り
図絵馬 守部

近世後期、伊勢神宮に集団で参詣するおかげ参りとともに、おかげ踊りが流行しました。上守部素盞鳴神社に伝わるこの絵馬は、おかげ踊りの場面を絵師桃田江永が描いたもので、天保二年（一八三一）九月に守部村の嘉蔵ら一七人が奉納しました。素盞鳴神社境内で、太鼓・笛・三味線などのお囃子に合わせて踊る人々の様子が描かれています。

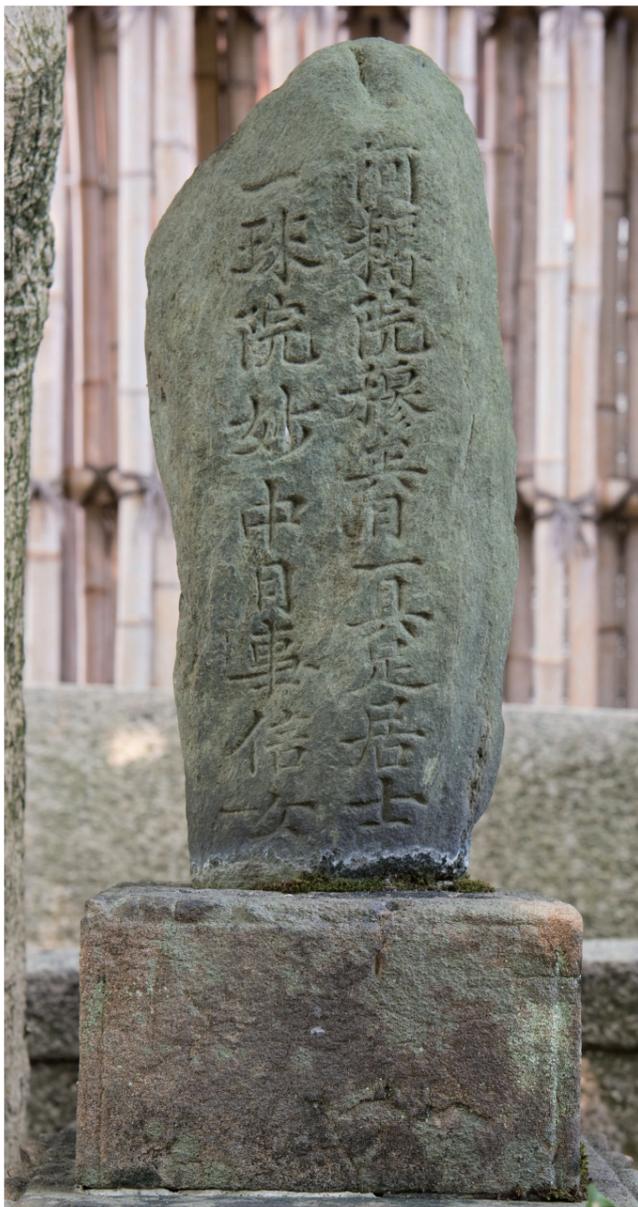
（尼崎市指定文化財、荒井英一氏撮影）

近松門左衛門墓 広濟寺

元禄（享保期（一六八八～一七三〇）の人名浄瑠璃・歌舞伎作者として名高い近松門左衛門は、久々知・広濟寺の開山講中に名を連ね、しばしば同寺を訪れたと伝えられます。

広濟寺墓所には近松の墓があり、表面に近松と妻の戒名、裏面には「享保九辰年十一月廿二日（二二日）」と近松の没年月日が刻まれています。

（国指定史跡）



広濟寺 昭和戦前期発行絵はがき





引札

引札というのは、商家などが顧客に配るチラシです。明治期から昭和戦前期にかけて、尼崎でも旧城下を中心に盛んに作られました。

上 醤油醸造兼酒問屋 高岡利右衛門本店

近世後半から近代にかけて、醤油は尼崎の特産品のひとつでした。尼崎町とあるので、この引札は市制が施行される大正五年（一九一六）以前のものです。京都に支店が設けられ、醤油が出荷されていたことがわかります。

下 干蒸菓子司 丹波屋義信

旧尼崎城下の目抜き通りである本町通の丹波屋は、干菓子・蒸菓子のほか宇治の銘茶も扱っていました。描かれているのは、新年に門付けをする萬歳の太夫と才蔵と思われます。引札には、こういっためでたい絵柄が好まれました。（いずれも尼崎市立地域研究史料館所蔵、武田壽夫氏撮影）

おおしよ 大庄公民館（旧大庄村役場）

昭和十二年（一九三七）一月、大庄村東字開キ（現大庄西町三丁目）に、鉄筋コンクリート造地上三階・地下一階の大庄村役場新庁舎が竣工しました。現在は製作が不可能とされる塩焼きタイルが外壁を覆い、壁面や塔屋に数々のレリーフを配したその斬新な姿は村民たちを驚嘆させ、雑誌『アサヒグラフ』第三一卷第二二四号（昭和十三年二月）にも取りあげられるなど、

当時「日本一の村役場」として話題を呼びました。

この庁舎を建てる三年前の昭和九年九月、大庄村は室戸台風により臨海部の集落が壊滅し、村役場の東に位置する大庄尋常小学校の木造校舎が倒壊するなど、大きな被害を受けます。それが三年の間に小学校を鉄筋コンクリート校舎（現大庄小学校校舎）により再建し、さらに庁舎を新築しました。臨海部を中心とする工業化、地域の都市化・人口の増大を背景とする、当時の大庄村の富裕ぶりがうかがわれます。

大庄村役場は、昭和一七年の尼崎市との合併後は出張所・支所となり、昭和四四年以降は大庄公民館として活用されています。日本を代表する建築家のひとりである村野藤吾（一八九一〜一九八四）が、若き日に手がけた最初の庁舎建築です。

（登録有形文化財、兵庫県景観形成重要建造物）

入り口上部壁面の、オリブをくわえた鳩のレリーフ





第一部グラフィア・バーチャル・ツアー「尼崎の歴史資料・文化財」

武庫大橋

昭和元年（一九二八）二月、大阪・神戸間を結ぶ新たな幹線道路として、阪神国道（現国道二号）が開通します。その際、武庫川に架かる武庫大橋が竣工しました。全長二〇〇メートル以上の鉄筋コンクリート製開腹アーチ橋で、現在は片側二車線の車道と両側の歩道のみですが、かつては中央部に軌道敷が敷設され、昭和五〇年（一九七五）五月まで阪神国道電車が運行していました。

両サイドの桁橋の部分は、中央部の六連アーチにデザインをそろえており、一体感を感じさせます。花崗岩製の欄干のていねいな造りや、照明を配した親柱、バルコニー、青銅製の電灯柱など、装飾性に富んだ意匠が特徴的です。

大正期から昭和戦前期にかけて、日本全国の橋梁設計を手がけた増田淳の作品です。平成一八年（二〇〇六）に、土木学会選奨土木遺産に認定されました。



阪神電鉄尼崎倉庫

阪神電鉄尼崎倉庫の前身は、創業当時に同社が車両に電気を供給するため、尼崎町旧城郭内（現北城内）に設けた尼崎発電所です。煉瓦造り二階建てで、隣接する尼崎車庫が完成した明治三七年（一九〇四）八月前後に竣工しました。煉瓦は英国から、鉄製アングルは米国から輸入し、英国人技師が設計・建築を行なったと伝えられます。

大正八年（一九一九）四月に発電所が廃止され、その後倉庫に転用されました。尼崎市内に残る数少ない明治期洋風建築のひとつです。



第一部グラフィア・バーチャル・ツアー「尼崎の歴史資料・文化財」



尼崎市庁舎

東七松町一丁目の現尼崎市庁舎は、大庄公民館（旧大庄村役場）と同じく、日本を代表する建築家のひとりである村野藤吾（一八九一〜一九八四）が設計しました。昭和二〇年（一九四五）以降、北城内の旧尼崎尋常高等小学校校舎（現市立琴ノ浦高等学校）を庁舎としていた尼崎市は、行政需要の増大による組織・人員増と庁舎の狭あい化、市域人口重心に近い庁舎立地などを理由に新庁舎建設を計画し、昭和三十七年一〇月、現市庁舎が完成・開庁しました。

村野は建物に加えて、テーブル・事務机・椅子・本棚・衝立といった家具・調度類もデザインし、庁舎全体のイメージを演出しました。低層部分に市民窓口を設け、中高層には内部部門を配置する機能的設計の一方で、ヨーロッパの庁舎建築にみられる伝統的市民ホールを意識した低層二階部分の空間や、窓を柱と柱の間ではなく柱の軸線上に設ける見せ方など、随所に村野らしさが表れた作品です。

（写真はいずれも竣工当時、多比良敏雄氏撮影）



白髪一雄 作品「大威徳尊」（一九七三年）

白髪一雄（一九二四〜二〇〇八）は、尼崎出身の抽象画家です。素足でダイナミックに描く「アクション・ペインティング」で知られ、国内外で高い評価を得ています。



戦後の日本を代表する前衛美術グループ・具体美術協会（一九五四〜七二）では、中心メンバーとして活躍しました。白髪は画家として精神の向上を計りたいとの思いから、比叡山延暦寺で密教の修行を行ないました（昭和四六年〜一九七一年に得度、法名・素道）。

本作は、その後に多く生み出された、密教を主題とした作品のひとつです。白髪は「仏のもつ精神的な輝きや強さを新感覚で画面に浮かび上がらせる」ことを望みました。本作で表された「大威徳明王」は、白髪が好んで描いた「不動明王」とならぶ五大明王のひとつです。多色を用いた鮮やかな色調と、鋭く力強い足の軌跡は六面（顔が六つ・六臂（腕が六本）・六足を持ち、一切の悪を降伏させる力を有するといわれる大威徳明王の勇壮なイメージを存分に表現しています。

白髪の没後、平成二五年（二〇一三）に尼崎市総合文化センター内に「白髪一雄記念室」が開設され、市が所蔵する白髪作品や資料が随時公開されています。

（解説・妹尾綾、尼崎市総合文化センター学芸員、写真は同センター提供、白髪一雄記念室については本書第三部第六章第三節3「アクション・ペインター白髪一雄と尼崎」参照）



工場夜景

産業遺産

撮影・解説

小林哲朗
てつろう

臨海部の工場地帯は、夜景撮影のスポットとして人気を博している。他市の大規模工場地帯と違い、小規模ながらも工場に近づいて撮影できるのが、尼崎市の工場地帯の魅力だ。また、全国の工場夜景を有する都市からなる「全国工場夜景サミット」へ加入し、産業観光の目玉としての期待が持たれている。

東浜ポンプ場ガス
タービンポンプ

市内の約四割が海拔
〇メートルの尼崎市
は、大雨時など運河や
河川の水を海へ排水
し、洪水による被害を
防ぐ必要がある。尼
ロックの東にある東浜
ポンプ場がその役割を
担っている。平成二六
年（二〇一四）設置の
最新型ガスタービンポ
ンプは、七秒間で二五
メートルプールを空に
する性能を持つ。いざ
というとき、尼崎を助
ける守り神のような存
在である。

